

八戸市南部における縄文遺跡の分布とその変遷¹⁾

中村哲也¹⁾

Distribution and Change of Archaeological Sites in Jomon period in the southern part of Hachinohe City

Tetsuya NAKAMURA¹⁾

Key Words : 遺跡分布 八戸市南部 遺跡の断絶性 中期末葉 寒冷化

1 はじめに

青森県には約4,860ヶ所の遺跡が所在し、そのうち縄文時代の遺跡は約3,480ヶ所とされている⁽¹⁾。縄文遺跡を草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に大別し、各時期に該当する遺跡を集計すると約5,570ヶ所という膨大な量の遺跡が知られているわけである。遺跡の分布や動態についての検討は1990年代から行われるようになった。それは主に情報処理技術の発達に伴って、情報処理技術者との連携、あるいは主導の下に行われ、統計的な取り扱いが主で、全体の傾向を知ることができるが、必ずしも考古学的な事象を十分にとらえ切れていない側面もあるように思われる。近年では、主に考古学の立場から時期毎に集落や住居についての検討が行われているが、やはり俯瞰的な視点から検討がなされている場合が多い。その一方で、遺跡の内実に立ち入った分析はほとんどなされていない。本稿では、主に八戸市南部の遺跡の分布と遺跡の内容を検討し、統計的な数字に表れた遺跡分布とその変化の実態を示したい。

2 青森県の遺跡分布

本稿で八戸市南部を対象とした理由は後述する。まず、ここでは従来の研究を振り返り、あらためて青森県の大別時期ごとの遺跡分布を概観する。小地域を対象として詳細な分析を行う際に、そのバックグラウンドを把握しておくことは有効であると考えからである。

(1) 遺跡数、住居数、遺跡分布等に関する先行研究

小山修三・及川昭文は、青森県の縄文時代遺跡を草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の各時期ごとに集計し、後期の遺跡増加を、寒冷化に伴う小規模で移動的な居住様式への移行ととらえている。さらに青森県を2km四方のメッシュに区分して、時期間の相関、地形区分などを集計し、後期に海拔300mを超える高地の利用が始まったことを指摘している。一方で、隣接する時期間で相関が高いことを指摘している(小山・及川 1996)。このデータからは、中期・後期の土地利用に関しては、新規に開発された地域を除けば、従来の生活の基盤を劇的に変更することはなかったとも解釈できる。小山・及川の研究は、時間的には縄文時代の後期の大別時期の枠組みで、2km四方の地理的領域を単位になされたものである。また、より移動的な居住様式へと変化したという解釈は上記二つのデータと中期に営まれた大規模集落の崩壊という経験的に指摘されてきた事象から導かれた解釈である。大枠での妥当性は認めなければならないが、後期の集落がどの程度まで小規模だったのか、客観的なデータは提示されていない。より細かな時間幅で、地理的領域ではなく、遺跡自体を対象として連続性と規模を検討する必要がある。

横山隆三・千葉史は、東北地方北半の遺跡分布図を作成し、地理・地形的な視点からの分析を行っている(横山・千葉 1997、千葉・横山 1999)。千葉史・貝森和美・横山隆三・菊池強一は縄文時代中期について、遺跡の密集度から遺跡ブロックを設定し、地形の斜度が遺跡分布のあり方を規定する要因の一つであることを示した。土器型式や遺構の種類などとの対照は今後の課題とされた(千葉・貝森・横山・菊池 2000)。青森県についていえば、前期末葉から中期初頭の土器型式圏は津軽・下北地方と南部地方に大別でき(中村 2004、2005、2007)、千葉らの設定した遺跡ブロックはある程度の妥当性を持っている可能性が高い。考古学の立場からは、遺跡ブロックの時期ごとの様相、時間的変化およびその要因を探ることが次の課題であろう。

斎藤慶史は小川原湖周辺の早期後半から前期の遺跡の消長や内容の変化を明らかにし、前期中葉以降、集落数が減少する一方で住居数は前時期と変わらないことから、居住が集約化したことを指摘している(斎藤 2009)。

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査 (〒0303-0802 青森市本町二丁目8-14)

村木淳は新井田側下流域における主な縄文・弥生集落を概観し、次のような時期ごとの特徴を述べた（村木 2011）。①前・中期には大規模遺跡が営まれる。②中期末葉から集落数が減少し、拠点集落とその周辺に点在する小規模遺跡から構成される。③晩期の遺跡は少数である。

市川健夫は八戸市内の竪穴住居数と居住規模を検討する過程で、比較のためのバックグラウンドとして青森県の住居を集計し、その変遷を縄文時代の別時期をさらに3分した時間幅で明らかにした（市川 2012）。分析の対象は住居跡数であって集落数ではないが、ある程度連動していることが予想され、遺跡数や遺跡分布を解釈する際の比較資料として重要である。

先行研究をまとめると、青森県の遺跡数・住居数の変化は、おおよそ次のような傾向が指摘されてきたことがわかる。

- ① 草創期から前期にかけての遺跡数・住居跡の増加
- ② 中期から後期への住居数の減少、大規模集落の解体、後期の遺跡数の増加
- ③ 後期から晩期への集落数、住居跡数の減少

先行研究の多くは、感覚的な説明か、統計的なデータから導かれたものである。一方で、統計的なデータを提示しつつ、具体的な遺跡の消長や遺跡内容の検討を行った研究は（斉藤 2009）などに限られる。前者の研究が全体の傾向を把握する上で重要であることはいまでもないが、遺跡の動態や集落の変遷を明らかにするためには、後者の研究も併せて推進する必要がある。

（2）青森県の遺跡分布

小山・及川が提示した縄文時代遺跡の時期ごとの集計は3423⁽²⁾であった（小山・及川 1996）。それからすでに18年が経過した。筆者が平成24年11月1日現在の青森県遺跡地名表から得たデータを集計したところ、縄文時代の遺跡数は約5570⁽³⁾で、およそ1.6倍に増加している。試みに平成4年3月刊行の青森県遺跡地図と平成24年11月1日のWEB版青森県遺跡地名表を比較すると、登録された全時代の遺跡数は前者で約3660、後者で約4860となり、増加率は約1.3倍である。増加分に縄文遺跡が多かった可能性もあるが、おなじ遺跡の該当時期を比較すると、後者で該当時期が増えている例がしばしばあることから、標本数の増加は登録遺跡の増加、および既登録遺跡における該当時期の増加両者によるものであろう。このような標本数の増加によって、先行研究によって示された傾向との異同を明らかにする必要が生じているといえる。

大別時期ごとの遺跡数

大別時期ごとの遺跡数を表1に示した。集計手順は次のとおりである。①大別時期の明らかな遺跡のみを集計する（縄文時代時期別遺跡数）。②各時期ごとに遺跡数の百分比を求める（縄文時代時期別遺跡比率）。③時期不明の遺跡数に各時期の百分比を乗じ、当該時期に加え、端数は小数点第2位で四捨五入する（補正（比例配分）縄文時代時期別遺跡数）。

なお、時期不明遺跡数を単純に6で除し、各時期に加えた補正（均等配分）縄文時代時期別遺跡数も参考に示した。標本数の少ない草創期では大きな差が出るが、他の時期については傾向が大きく変わるほどの差は見られない。

第1表 青森県における大別時期ごとの縄文遺跡数

	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明
補正（均等配分）縄文時代時期別遺跡数	121.5	480.5	1001.5	955.5	2017.5	1001.5	
補正（比例配分）縄文時代時期別遺跡数	10.2	418.8	1011.6	959.3	2167.7	1011.6	
縄文時代時期別遺跡数	9	368	889	843	1905	889	675
縄文時代時期別遺跡比率	0.18%	7.5%	18.2%	17.2%	38.9%	18.2%	

小山・及川の集計では草創期が含まれていないが、草創期の遺跡登録数は少ないため、草創期を加えた集計と比較しても大きな問題にはならないと考えられる。結果として、早期～晩期に至る遺跡数の変化の動向はよく一致している。遺跡数は早期～前期にかけて増加し、中期でやや減少するが、後期には最大になり、晩期には前期と同程度まで減少する。

時期間の断絶性

大別時期間における遺跡の断絶性を検討するため、表2に遺跡数・継続遺跡数・新規遺跡率数を示した。新規遺跡率は連続する二時期に該当がある遺跡数を連続する二時期の新しい方の遺跡数で除し、小数第2位を四捨五入した値を1

から減じたものである。たとえば草創期・早期に該当がある遺跡数5カ所、早期の遺跡数368カ所で、新規遺跡率は $(1-(5 \div 368)) \times 100=98.6\%$ となる。

第1表 青森県における縄文時代遺跡の断絶性

	草創期 - 早期	早期 - 前期	前期 - 中期	中期 - 後期	後期 - 晩期
新規遺跡率	98.6%	77.3%	49.6%	69.0%	43.6%
継続遺跡数	5	202	425	590	501
遺跡数	368	889	843	1905	889

この指標は新規に営まれた遺跡が、該当時期の遺跡数に占める割合を示したものである。遺跡数が増加する草創期 - 早期、早期 - 前期、中期 - 後期は新規遺跡率が高く、前時期とは断絶生が高いといえる。一方、遺跡が減少する後期 - 晩期は、前期 - 中期の遺跡数と同程度だが、前時期からの遺跡数の変化を見ると、前期 - 中期は遺跡数が微減するのに対して後期 - 晩期は5割以下に激減する。このことは、中期の遺跡は新規に営まれた遺跡が一定以上存在したこと、晩期の遺跡は後期の遺跡との継続性が高い可能性を示している。ここで示した時期ごとの断絶性は、小山・及川の時期間の相関関係に対する評価（小山・及川 1996）とは一見矛盾するように見える。しかし、小山・及川はメッシュ法を採用しており、その示すところは遺跡の立地傾向であって、遺跡個別の断絶性を示すわけではない。むしろ、小山・及川による分析と本稿における分析の両者を合わせて解釈する必要がある。すなわち、青森県においては新規の遺跡が営まれる率が高い時期にあっても、遺跡立地を完全に一新するような劇的な変化は起こらなかったといえる。こうした傾向は、大別時期ごとの遺跡分布図からもある程度読み取ることができる。（図1）。ただし、これは大別時期の枠組みでの議論であって、一定の傾向を反映していると期待されるものの、遺跡の連続性 / 断絶性については個々の遺跡についてより細かな時間幅で検討する必要がある。従ってその対象は発掘調査を経た遺跡とならざるをえない。

3 八戸市南部の遺跡分布とその変遷

前項で指摘したように、遺跡立地の相関と個々の遺跡の消長は別の問題である。遺跡分布とその変化の意味を探る上で、個別遺跡の消長をより細かな時間レベルで、具体的には土器型式レベルで、検討する必要がある。遺構に見る集落の時間は、同一土器型式内で重複関係があるなど、土器型式より細かな時間レベルでの分析が求められる側面もあり、土器型式より短い時間幅の集落内分析と遺跡の消長を関連づけて分析することも大きな課題ではあるが、現実的に検討可能な遺跡は僅少である。当面は土器型式レベルで検討するほかない。

八戸市は青森県の南東部に位置する。岩手県から流れる新井田川・馬淵川、十和田湖周辺を源流とする浅水川によって形成された沖積地と、その北・西・南を取り囲む丘陵地からなる。ここでいう八戸市南部は、南郷村と合併する以前の八戸市域南部の意味であり、沖積地の南側、東西はおおむね太平洋と馬淵川、南は頃巻沢 - 褌子を結ぶラインで囲まれた範囲である。実際には作図の都合上、東は太平洋岸を除いてある。この地域は、八戸ニュータウンの開発に伴って、約330haの範囲で遺跡の内容が把握されている。さらには周辺の遺跡の分布も比較的詳細に知られており、開発に伴って発掘調査された遺跡も少なくない。詳細な遺跡の消長を知る上で、良好な条件を備えた地域なのである。これより南の地域では、八戸市南郷区島守で遺跡分布が詳細に知られているが、それ以外では一般に遺跡の分布が疎らであり、開発の程度や土地利用のあり方から、見かけ上の分布の疎密が生じている可能性が考えられる。

検討対象としたのは縄文時代前期後半（円筒下層式期）から後期の遺跡で、2009年3月までに刊行された関連市町村と青森県教育委員会の発掘調査報告書を基本とする。内容がある程度把握できる集落を一定数確保する必要があるからである。

図2に八戸市南部域の遺跡分布を、表3にはその中で発掘調査が行われた遺跡を示した。表中の網掛け部は出土土器から見た遺跡の時期、数字は当該時期の住居数を示す。遺跡の内容は住居数だけで把握できるものではないが、大枠では居住のあり方を反映すると考えられる。住居数は、時期決定できるものは当該時期に計上した。時期不明なものは、周辺の出土遺物や遺跡全体の時期などを勘案し、可能性のある型式に均等に割り振った。たとえば3型式に該当する可能性があるなら、各型式0.33である。前期前葉、中葉などのように概略の時期しかわからないものも同様である。このような処理により端数が生じたため、遺跡ごとの住居跡総数は、実際とは異なっている場合がある。遺跡の番号は図中の番号と一致する。土器型式や大別時期の細分などは表に示したとおりである。大木10式平行期は、遺跡分布の画期となる可能性があったので、やや細かく区分した。そのため、他の型式と不均等になっている可能性もあるが、表にはより上位の区分も併せて示しているの、傾向を読み取るうえで問題はない。

表中の遺跡の配列順は、おおむね上半分が土橋川、または現在の国道340号線の西側（以下、単に西半）、下半分が

東側（以下、単に東半）の遺跡である。縄文時代前期後半から中期後葉にかけて、東半に複数の遺跡が見られ、住居跡も検出されているのに対して、西半では土器が出土した遺跡はあるものの、住居跡は検出されていない。西半は、八戸ニュータウンの開発に伴って発掘調査が行われており、また、隣接する田面木平遺跡や田面木遺跡も開発に伴って発掘調査が実施されているため、概要は十分に把握されている。従って多量の遺構が累積する遺跡はなかった、またはほとんどなかったと考えられる。東半の一王寺(1)遺跡や蟹沢遺跡は試掘調査が主体であった。そのため当該時期の住居跡は調査されていないが、検出遺構数や出土遺物から、多数の遺構が累積する集落であったと推定される。前期の住居跡も存在した可能性が高い。

松ヶ崎遺跡は約 28 万㎡の広大な面積が遺跡範囲と考えられているが、発掘調査が行われたのは 2002 年までで 8,395 ㎡にすぎない（青森県教育委員会 2011）。しかし、これまでの発掘調査の内容から前期後半から中期後葉にかけて多数の遺構が累積する集落だったことは明らかである（図 3・4）。

松ヶ崎遺跡周辺にはほかに前期から中期の重地遺跡、中期の石手洗遺跡がある。重地遺跡は時期ごとの住居跡数は少ないが、大型住居を含む集落である。

このように、東半の新井田川水系には前期から中期の集落が営まれている。これに対し、西半では、土器は出土する遺跡が少数あるものの、前期から中期中葉の集落が認められない。集落が出現するのは中期後葉からである。

東半の遺跡について、集落の内容を含めてやや詳しく見ておこう。松ヶ崎遺跡（図 3・4）では前期や中期初頭の遺構は遺跡東部に認められる。調査面積が小さいため、その数は少ない。中期中葉から後葉には遺跡の中央部付近で多数の住居跡が重複をもって累積している。中期末葉になると住居跡は重複が認められなくなる。遺跡の北端では中期後葉から後期初頭ごろのフラスコ状土坑が数基検出されている。集落内での土地利用の密度や頻度が分散化し、後期初頭のうちには消滅するらしい。

松ヶ崎遺跡の中心部から西方約 500m には黒坂遺跡が所在する（図 3・5）。黒坂遺跡は後期初頭の遺構が中心だが、中期後葉最花式のフラスコ状土坑が 1 基で検出されている。付近に他の遺構は伴わない。後期初頭の集落は全体像は明らかになっていないが、遺跡の登録範囲と既発掘調査区の様相から見る限り小規模なものである。

松ヶ崎遺跡の南西側に弥次郎窪遺跡が隣接する。中期末葉以降集落が断続的に営まれる。後期前葉以降の住居跡は 10 棟検出されているが密度は低い。

中期中葉以降、一王寺(1)遺跡の周辺では、糠塚小沢遺跡、長久保(1)遺跡、新田遺跡、潟野遺跡、是川堀田遺跡など新たな集落が成立し始め、その規模はいずれも小さなものである。その傾向は最花式から大木 10 式平行期に顕著である。

このように、東半では前期に蟹沢遺跡、一王寺(1)遺跡、松ヶ崎遺跡、重地遺跡などの集落が成立し、中期に至る。中期中葉頃までは一地点を利用する密度・頻度は高かった。中期後葉以降、土地利用の密度・頻度は分散傾向を示す事例が見られるようになり、新たな集落も成立する。後期に至り、それまで長期にわたって遺構の累積が見られた遺跡も次第に衰退する。新たに成立した集落も、遺構の累積規模は小さなものである。

西半では、中期末葉以降、鶉窪遺跡、田面木平(1)遺跡、丹後平(2)遺跡、葦窪遺跡などで住居跡が見られるようになり、それ以降、土器の出土や住居の検出事例が増加する。後期初頭から前葉にかけて、田面木平(1)遺跡、丹後平(2)遺跡などで遺構の累積規模が比較的大きい集落が現れる。

遺跡分布の変遷とその背景

前項で縄文時代中期末葉を境として、八戸市南部域では遺跡分布に大きな変化が生じていることを指摘した。このような変化が生じた背景として、多くの研究者が指摘する縄文時代中期から後期にかけての寒冷化（安田 1980、福沢ほか 1998、川端・山本 2010 など）のインパクトがあった可能性は高い。三内丸山遺跡周辺では縄文時代中期には現在より 2 度ほど温度が高く、寒冷化により現在と同程度になったと考えられている。2℃の差は現在の気候では緯度方向の距離にして約 230km に相当し、寒冷化以前は三内丸山遺跡では酒田・仙台付近の気候と同様であったと考えられるという。こうした気温低下が、クリ林の衰退を招いたことが指摘されている（川端・山本 2010）。ただし、その後のトチ林の拡大には人為的な影響を評価する見解がある（吉川 2008）。

この時期に生じた遺跡分布の変化の実態は、あらたな環境に進出する場合もあるが、気候的にも地形的にも大きな差違は認められない移動の場合も多いと推定される。小山・及川が指摘した時期の相関（小山・及川 1996）は、このような実態を反映しているのだろう。事実、青森県全体の分布図からもその傾向を窺うことができる。そうだとすれば、仮に寒冷化により八戸市南部でクリ林の衰退という現象があったとしても、その規模や、クリ林に対する縄文人の依存度を評価する必要がある。寒冷化が大きなインパクトを与えた可能性はあるにせよ、現段階で、そのみが集落内部の分散化と、それに伴って数百 m から数 km の近傍での新規遺跡が出現する原因だったとするのは拙速であろう。複合的な要因を、選択しうる可能性として保持しておくべきではなかろうか。

さて、縄文時代中期末葉を境にした遺跡分布の変化を八戸市南部という地域的枠組みの中で指摘したが、空間的な枠組みは任意のものであり、当時の実態を反映している保証はない。論理的には、遺跡分布のみからは遺跡を営んだ集団の系統性は保証されず、東半の遺跡を営んだ集団が別の地へ移動し、他地域の集団が西半に移住して遺跡を営んだ可能性も考えられるのである。もっともこれは仮定の話であって、中期後葉から末葉の土器の系統からみた場合、他地域の土器が流入しているとはいえない。ただ、やはりある程度の論理的な枠組みは準備されなければならない。現時点ではどの程度の空間的大きさで遺跡分布を検討するのがよいか明確な答えはない。今後は空間的な範囲を広げての検討と遺跡の類型化が必要である。その際、千葉らが示した遺跡ブロックの大きさやそれを抽出した手法（千葉・横山・貝森・三上 2000）は参考になるかもしれない。実際には、他の要因も存在するはずだが地形の斜度も基本的な要因の一つであることは確かだろう。

まとめ

青森県の遺跡分布に関する先行研究を概観し、統計的・感覚的な説明により、これまでに①草創期から前期にかけての遺跡数・住居跡の増加 ②中期から後期への住居数の減少、大規模集落の解体、後期の遺跡数の増加 ③後期から晩期への集落数、住居跡数の減少が指摘されてきたことを確認した。遺跡分布の実態をよりいっそう明らかにするためには、統計的な取り扱いとともに個別遺跡の実態に即した分析を進める必要があることを説いた。その上で②について、八戸市南部の遺跡分布とその変化について検討し、東半と西半で分布に差異があることを指摘した。中期から後期にかけての遺跡分布や内容の変化は、しばしば寒冷化とクリ林の衰退が要因として指摘されている。そのインパクトは否定できないにしても、遺跡分布からみれば、数百mから数km内の近傍に遺跡が新たに営まれることから、複合的な要因を選択する余地を残しておくべきだと考えた。

遺跡分布を検討する上で、地理的な範囲の大きさをどこに設定するべきかは今後検討が必要である。土器型式や遺構のタイプ、地理的障壁など様々な側面から考えなければならない。若干の予測を述べておくと、千葉らが示した遺跡ブロック（千葉・横山・貝森・三上 2000）を超えることはないであろう。なぜならこの時期には上述の遺跡ブロック程度の範囲で地域性を読み取ることができるからである。例えば、大型住居の大きさがピークを迎える時期は、東北部から北海道に向けて時間的傾斜を持っていることは明らかである（北日本縄文文化研究会 2011）。青森県三八地方では中期末葉には長軸長が最大で15m前後になるが、津軽地方では、最大30m級の大型住居が認められ、北海道へ向けての時間的傾斜のなかで理解できる。さらには住居跡の炉形態にも違いが認められる。

また、遺跡分布を考える際、どのような居住様式を想定するかによって解釈が異なる可能性もある。たとえば反復的な居住様式を考える場合と通年定住的な居住様式を考える場合である。アприオリに居住様式を決定し遺跡分布を解釈することは避け、注意深く考える必要がある。

謝辞

千葉史氏、市川健夫氏には文献を提供いただき、またご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。

註

- (1) 平成24年11月1日現在の青森県遺跡地名表WEB版による。青森県遺跡地名表では当該遺跡が所在する市町村コードと市町村ごとに1から始まる3行の番号を組み合わせた一意の数字を各遺跡に割り振っている（遺跡番号）。複数市町村にまたがって所在する遺跡は、その範囲に含まれる市町村の数だけ遺跡番号を持つことになり、集計の際に重複を取り除かなければならないが、今回は実施できていないため「約」を付した。ただし、見とおしとしては集計結果の解釈に大きな影響を与えるほどのものではない。
- (2) 集計項目には「時期不明」がないので、大別時期が明示された遺跡に限られる。また、複数時期にわたる遺跡は重複して集計されることとなる。
- (3) 集計方法は註(2)に同じ。「約」を付した理由は註(1)に同じ。青森県全体の遺跡数集計は「約」を付さないが、同様の誤差を含んでいる。

参考文献

- 青森県教育委員会 1992 『青森県遺跡地図』 青森市
- 青森県教育委員会 2011 『松ヶ崎遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第497集 青森市
- 市川健夫 2012 「八戸市内における縄文時代の竪穴住居跡数と居住規模」『研究紀要』11 pp.1-20 八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館 八戸市
- 岡田康博 2000 「東日本の縄文文化」『季刊考古学』64 pp.31-35 雄山閣出版 東京都
- 川幡徳高・山本尚史 2010 「縄文時代の古環境、その2 -三愛丸山遺跡周辺の環境変遷-」『地質ニュース』666号 pp.31-38 産業総合研究所地質総合研究センター つくば市
- 北日本縄文文化研究会 2011 『北日本縄文時代大型住居集成』青森市
- 小山修三・及川昭文 1996 「青森県遺跡データベース-遺跡分布から探る地域性-」『シンポジウム「考古学とコンピューター」』pp.5-10 重点領域「人文科学とコンピューター」事務局 葉山町
- 斉藤慶吏 2009 「青森県域における縄文時代前期前半期集落の様相」『日本考古学協会 2009年度山形大会研究発表資料』pp.319-336 日本考古学協会 2009年度山形大会実行委員会 山形市
- 千葉史・横山隆三 1999 「遺跡立地の地形的特徴」『情報考古学』5-1 pp.1-12 京都市
- 千葉史・貝森和美・横山隆三・菊池強一 2000 「地理情報システムを用いた遺跡ブロックの形成と最適交流経路の推定」『情報考古学』6-2 pp.1-10 日本情報考古学会 京都市
- 福沢仁之・加藤めぐみ・山田和芳・藤原治・安田喜憲 1998 「湖沼年縞堆積物に記録された最終氷期以降の急激な気候・海水準変動」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』9 pp.5-17
- 中村哲也 2005 「三八・上北・下北地方の前期末から中期初頭の土器」『東北・北海道の前期末葉～中期初頭土器の課題』pp.241-298 海峡土器編年研究会 青森市
- 2007 「青森県における前期末葉から中期初頭の土器編年」『円筒土器文化の諸問題』pp.75-92 青森県考古学会 青森市
- 村木 淳 2011 「新井田川下流域における縄文・弥生集落」『季刊東北学』26 pp.44-66 東北芸術工科大学東北文化研究センター 山形市
- 安田喜憲 1980 『環境考古学事始』pp.161-164 日本放送出版協会 東京都
- 横山隆三・千葉史 1997 「地理情報システムを用いた遺跡データベース構築」『情報考古学3-2』pp.29-40 日本情報考古学会 京都市
- 横山隆三・千葉史 2002 「地理情報システムによる遺跡データベースの構築」『電子情報通信学会誌』85-3 pp.176-180 電子情報通信学会 東京都
- 吉川昌伸 2008 「東北地方の縄文時代中期から後期の植生とトチノキ林の形成」『環境文化史研究』1 pp.27-35 環境文化史研究会 柏市
- (紙数の都合で個別の遺跡報告書は割愛した。)

図版出展

第1図：筆者作成

第2図：筆者作成（地形図は国土地理院発行 1/50,000 地形図『八戸西部』・『八戸東部』・『新井田』を複写）

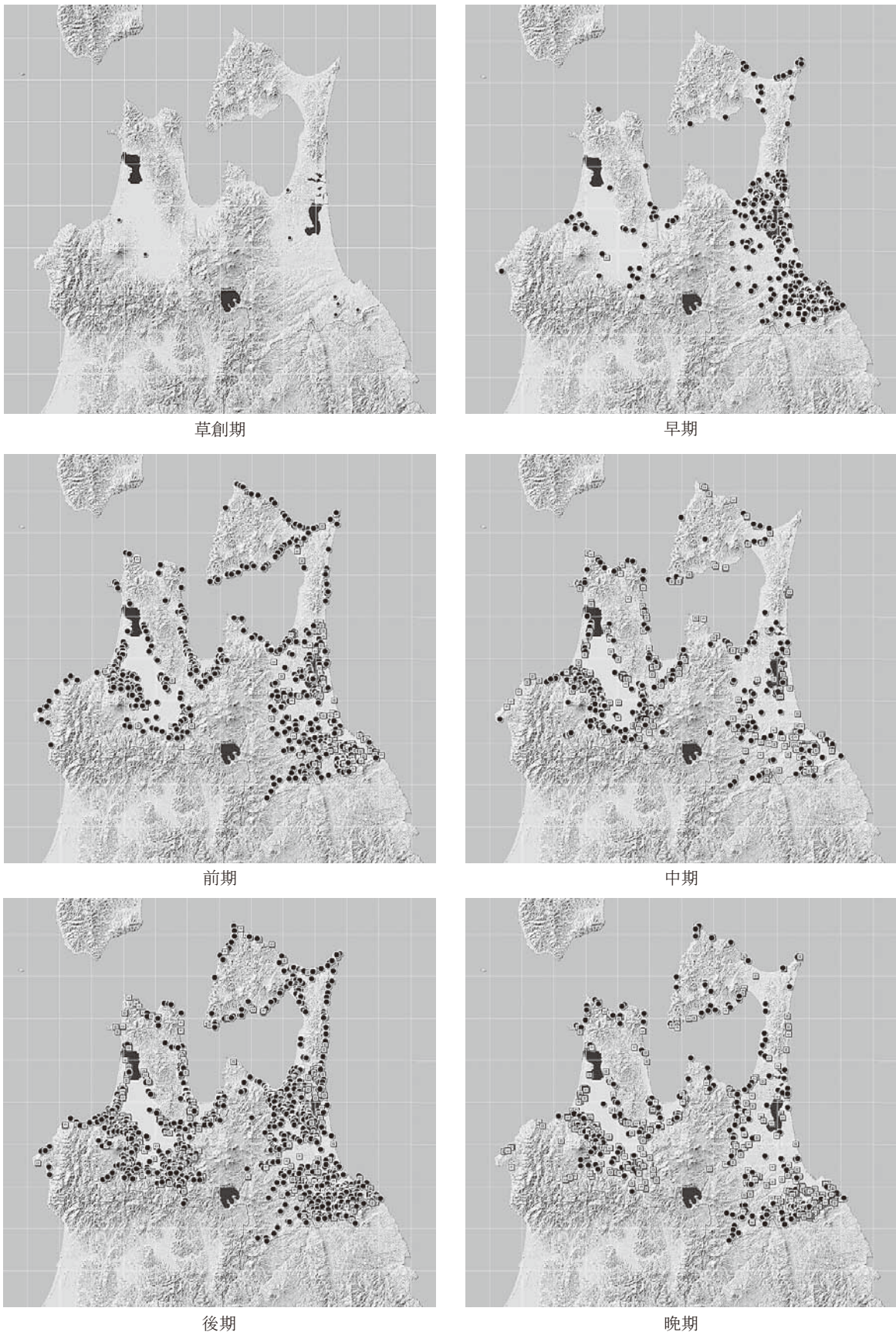
第3図：『松ヶ崎遺跡Ⅲ』（青森県埋蔵文化財調査報告書第497集 青森県教育委員会発行）図2を改変

第4図：『松ヶ崎遺跡Ⅲ』（青森県埋蔵文化財調査報告書第497集 青森県教育委員会発行）図2を改変

第5図：『松ヶ崎遺跡Ⅲ』（青森県埋蔵文化財調査報告書第497集 青森県教育委員会発行）図2を改変

第6図：「蟹沢遺跡」(『八戸市内遺跡発掘調査報告書10』八戸市埋蔵文化財調査報告書第74集 八戸市教育委員会発行)

第1図・第2図を改変



前時期から継続する遺跡



大別時期に該当がある遺跡

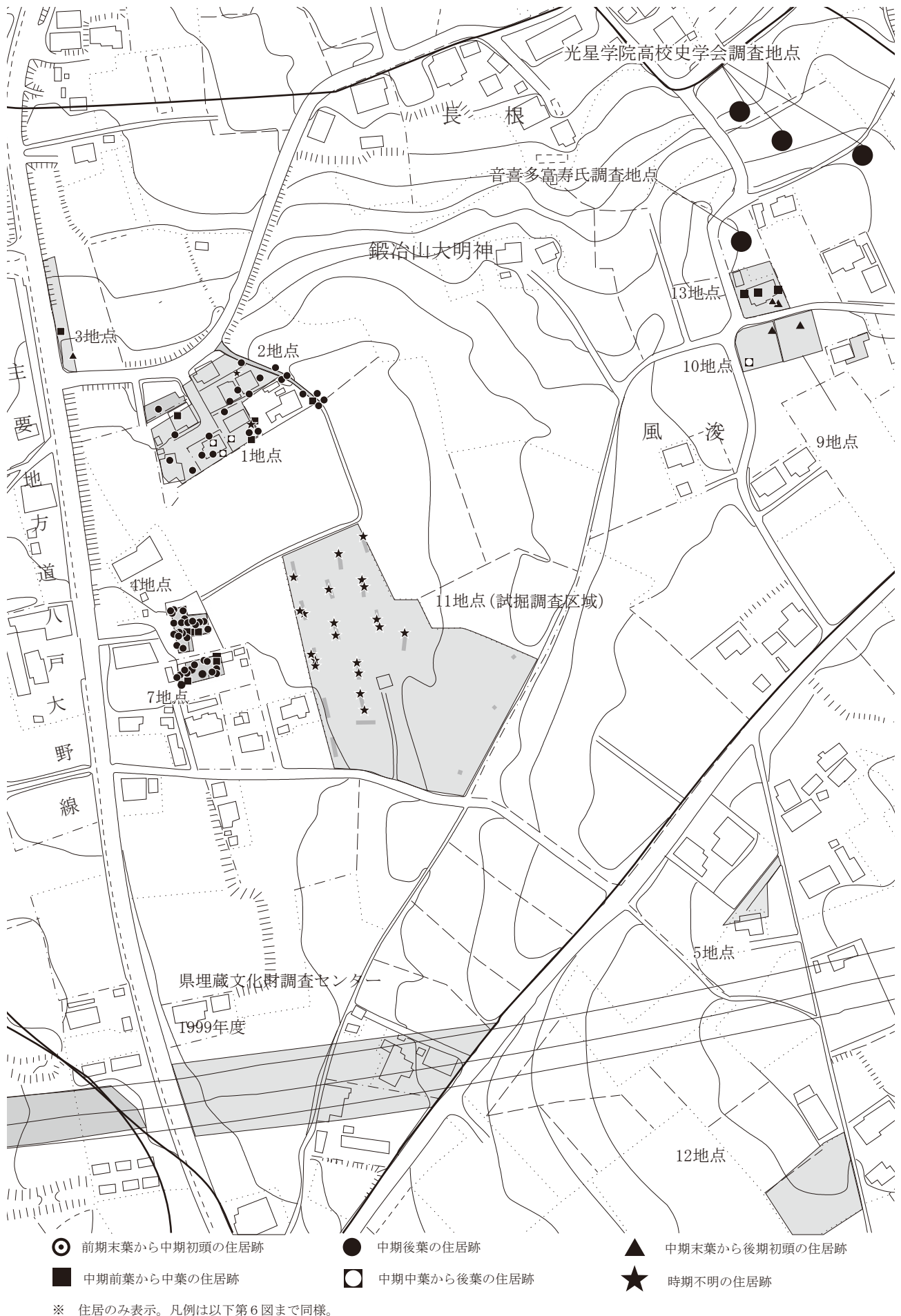
第1図 青森県の縄文遺跡分布図（大別時期ごと）



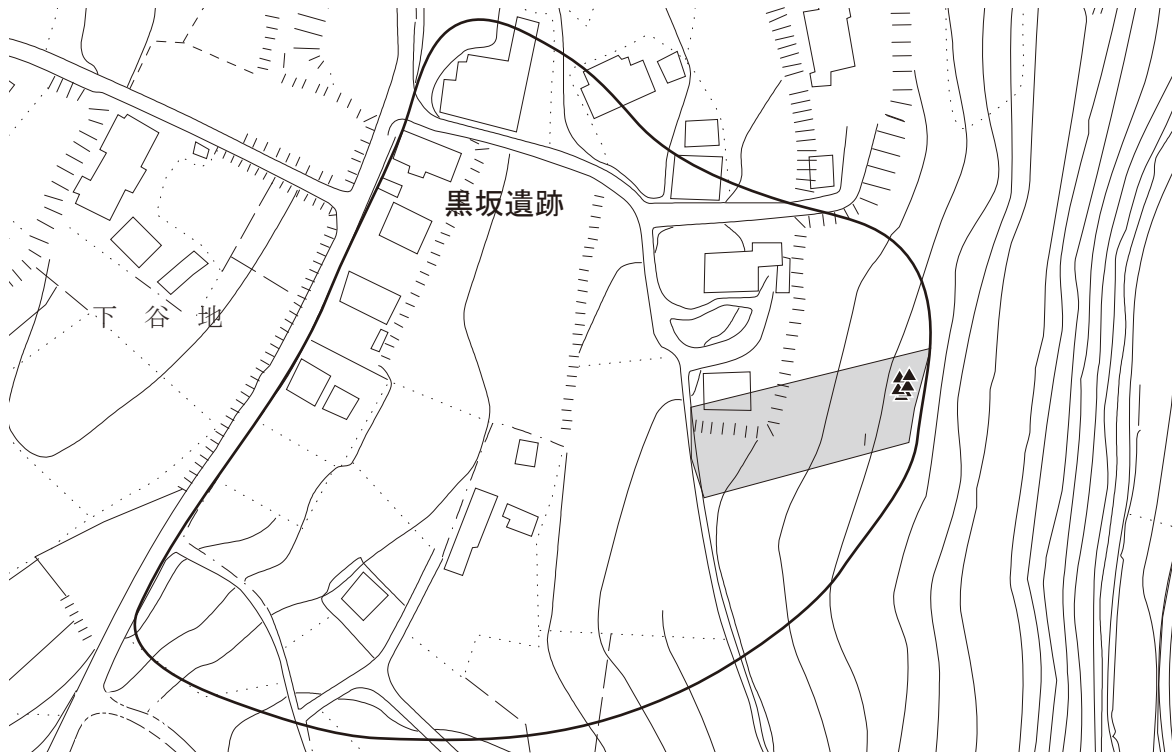
第2図 八戸市南部の縄文遺跡分布図（前期から後期）



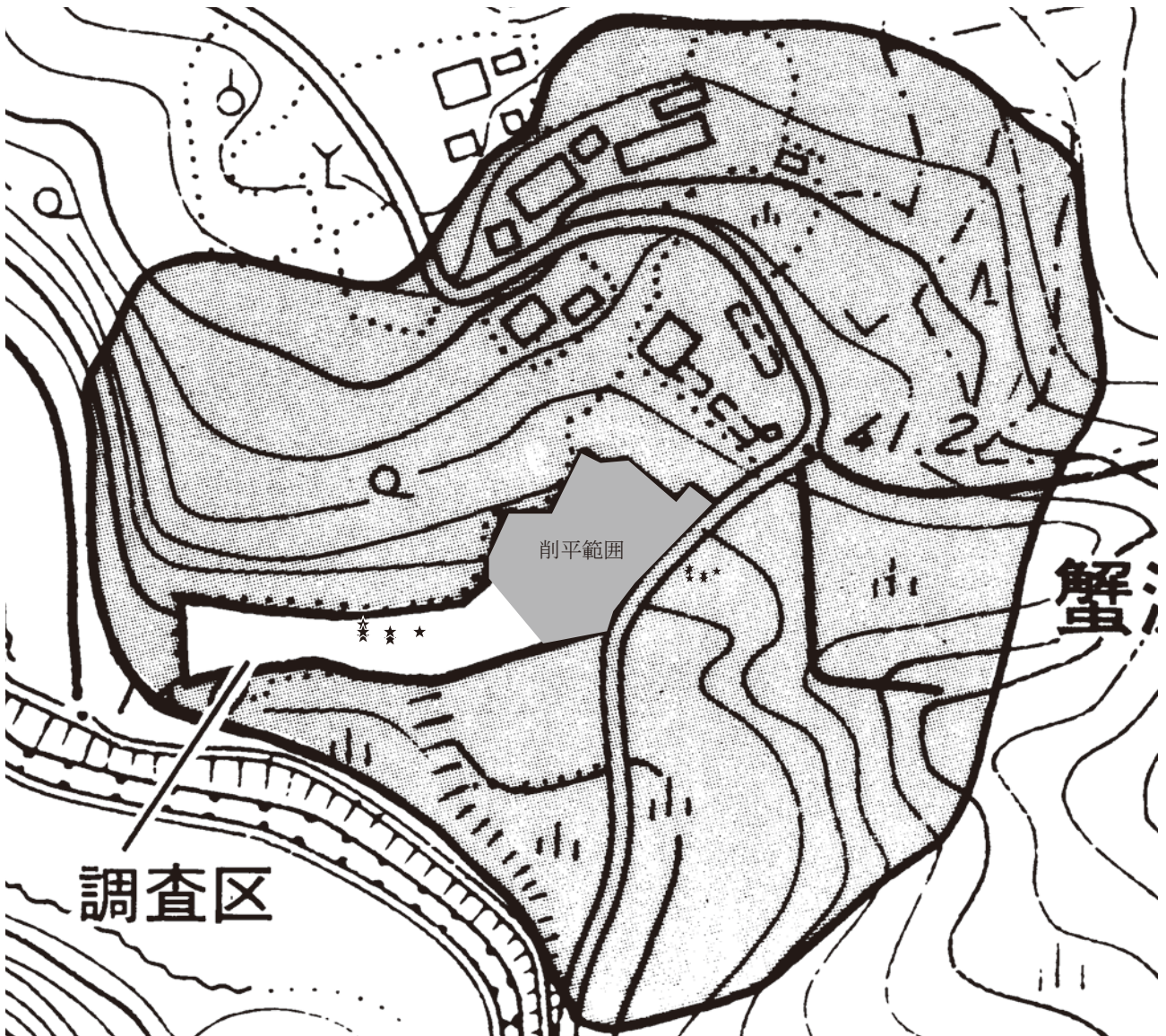
第3図 松ヶ崎遺跡と周辺の遺跡 (1/7,500)



第4図 松ヶ崎遺跡遺構配置略図 (1/2,000)



第5図 黒坂遺跡遺構配置略図 (1/2,000)



第6図 蟹沢遺跡遺構配置略図 (1/2,500)